

弁護士の目でみる「映画評論」その2

弁護士 坂 和 章 平

弁護

「『金融腐蝕列島・呪縛』を考える」

一九九九年一〇月一五日、住友銀行とさくら銀行の合併というトップ記事が新聞紙面を踊った。規模もさることながら、住友・三井という旧財閥の枠を破った決断は人々をアツと驚かせた。これは八月の興銀・第一勧銀・富士の三行統合の発表に次ぐ金融再編の動きであり、金融界のキーワードが「再生」から「霸権」に変わりつつあると論評された。

翌一六日、今度は三井火災・日本火災・興和火災の三損保統合の発表。「金融メガ再編」の意義と課題が各誌で特集された。日本の金融界はまさに激変の時代を迎えようとしていた。

その四ヶ月後の今、二〇〇〇年二月。この原稿を書いた直前には、アメリカ大統領クリントンの、史上最長の景気拡大を達成したアメリカ経済の絶好調さをバネとして、具体的な数字を並べたてた自信たっぷりの議会での一般教書演説と、通商状況ニッポンの中でアップアップし、精神論ばかりを強調した小渕総理大臣の国会での施政方針演説が、多少揶揄的に対比された。

日本の不良債権問題処理が未だ完了せず、金融再生のシナリオも未だ確立しない中、「ペイオフ延期」にみられるように、金融再生のテーマは、次第に焦点がボケはじめているように見える。

* * * * *

日本の「金融腐蝕」ぶりは一九九一年の証券スキヤンダル（損失補填問題、指定暴力団会長の仕手戦への資金提供、株価のつけ上げ協力等）を振り出しに、「イトマン」不正融資事件の発生、富士銀行・協和銀行・東海銀行等による巨額の不正融資事件の発覚等により白日の下にさらされた。

一九九七年には、株取引の損失補填を四大証券に迫った、著名な「総会屋」小池隆一への利益供与事件も発覚した。

これらの金融腐蝕は、総会屋・右翼・暴力団等、日本社会の中に深く静かに潜行し続ける闇の勢力と、最も清潔であるべき銀行・証券という金融業界のトップとの癌着、逃れようとしても逃れられない「呪縛」の中で生まれたものであった。

そして東大法学部を卒業した日本で最も優秀とされる大蔵省エリート官僚たちは、国家の大計を考え・悩みながら日本経済の舵とりをしたもの、大局的にその方向性を誤ったうえ、多くの人物がその金融腐蝕の中にのみ込まれてしまった。

「M O F (Ministry Of Finance) 担」。これは銀行の大蔵省担当者を指す。大蔵省の方針・考え方をいち早く察知したり、銀行への検査期日のさぐりを入れるために、大蔵省に毎日出入りし、担当官と接触する。この言葉は今や、大蔵省銀行局の若手官僚と銀行の総務担当中幹エリートとの癌着を象徴する言葉となった。そして「下ネタ」から見た「M O F 担」の苦労を象徴するのが、この映画の原作となった「金融腐蝕列島」とサンケイ新聞連載の「呪縛」のストーリーに出てくる「ノーパンしゃぶしゃぶ」による接待だ。これは日本人にはきわめてわかりやすい「接待」づけによる情報収集手段である。永田町における「料亭政治」も本質的にはこれと同じようなものだ。

* * * * *

一九九六年住宅金融専門会社（住専）七社の貸付債権を受け継ぐ住宅金融債権管理機構（住管機構）が設立。中坊公平弁護士が社長に就任した。住専七社の不良債権処理のため、六八〇〇億円の税金投入の可否が国民的議論となつたが、結局はゴーサイン。以降、「金融機関の保護・金融制度の安定」という名目の下、都銀・信託銀行など大手十五行に総額七兆円余りの公的資金が投入された。

今、手元に面白い本がある。作家村上龍が書いた『あの金で何が買えたか』という本（一九九九年八月出版）だ。これは数千億・数兆円という金額の意味・重みをわかるようにするために、何億・何兆のお金があれば、何が買えるのかをわかりやすく・面白く解説した絵本で、「バブル・ファンタジー」という副題がついている。たとえば末野興産の負債総額は六〇〇〇億円だが、それだけのお金があれば、1)朝日新聞全面広告一〇年分一〇九五億円、2)オリンピックを個人で開催二〇二八億円、3)黄金の三角地帯（タイ・ラオス・ミャンマーの国境地帯）のヘロイン一年分の破棄費二〇〇〇億円、と使っても、4)おつりが八七七億円残る、という計算だ。わずか一〇〇頁の絵本だが、ここ一〇年の日本の金融腐蝕ぶりを数字の対比で実にうまく表現している。

* * * * *

そんな時期、一九九九年一〇月、「金融腐蝕列島・呪縛」が封切られた。主役のナイスミドル、企画本部副部長北野浩（四一才）を演ずるのは、おなじみの役所広司。彼と行動を共にする四人組の一人は、最近人気急上昇の椎名桔平。役所の妻は私が昔から好きな女優風吹ジュン。風吹の父で役所の勤める朝日中央銀行（A C B）のドン（元会長・元頭取）は、存在感たっぷりで実際にイヤラしい守旧派権力者を演じた仲代達矢。豪華な顔ぶれだ。面白いのは原作にない、若村麻由美扮する外資系TVチャンネルのアンカーワーマン。日本流に言えばニュースキャスターだが、これが実際にカッコイイ。いつもなぜか（健康のため）、ペットボトルを持って走り回り、問題の本質に最短距離で迫っていく。

「金融腐蝕列島」というタイトルから、古い世代は、かつての山本薩夫監督の「金環蝕」を思い出すだろう。しかしながら金融問題をテーマにした「社会派」ドラマである点は共通だが、この映画の「つくり方」は「金環蝕」とは全く違う。ストーリー展開はスピードで本筋以外の余分な話はほとんど入れない。ショットの切り替えやセリフ回しも早い。よほど集中して観ていないといけないほどだ。そのうえ、金融関係の専門語がポンポン出てくる。たとえばさつきの「M O F 担」。セリフの中で、「もふたん」と喋られても、何のことかわからない人も多いはずだ。「迂回融資」、「日銀考查」、「ボード」（経営会議のこと。そのメンバーをボードメンバーという）なども同じ。なお休憩時間中には、ミポリンこと中山美穂が歌う映画の主題歌、「A d o r e」の美しい旋律が流れてくる。この曲はヒットしなかつたが、映画の主題歌としては美しく哀愁にとみ、役所ら戦う企業戦士たちの喜びと悲しみを歌いあげた名曲だ。

映画のストーリー 자체は単純なもの。

大物総会屋逮捕のニュースが流れ、A C Bによるこの総会屋への三〇〇億円の不正融資疑惑が発覚する。しかしA C B 経営幹部の危機感は薄い。遂に東京地検特捜部の強制捜査が開始。しかしA C B のドンはあくまで不正融資を否認し、「もみ消し」を画策する。これに対し役所ら四人組は、銀行再生のため過去の呪縛を断ち切り、徹底的な真相解明とA C B の旧ボードメンバーの総辞任を迫っていく。

* * * * *

私はこの映画を観ながら途中何度か涙を流してしまった。それにしてもA C B は出来のいい弁護士をそろえたものだ。A C B ほどの大銀行ともなれば、弁護士会の会長経験者の大先生の登場が普通だが、映画はそうではない。A C B の古いウミを徹底的にはき出すための株主総会をやるについて依頼した弁護士は、若手で行動力抜群の連中だった。特にリーダー格の女性弁護士のキャラクターは特筆ものだ。失礼ながら、まずお世辞にも「容姿端麗」でないところがいい。その彼女が、いかなる危機の場面においても顔色ひとつ変えず、冷静・沈着に対応し、指示を出していく。実に頼りがいがある。現実にはこれほどの能力を持った弁護士を捜し当てることはむずかしいだろう。主人公の役所は「改革派」ミドルエイジ四人組のリーダーとして、また真相調査委員会の委員長として、自分が勤めていた銀行の過去の恥部を暴き、責任の所在を追及していく。映画では小気味いいペースで真相解明が進み、A C B 再生のシナリオが描かれる。そしてそこには例のアンカーワーマンが貴重な情報源となり、大きな役割を果たす。

しかし、これらの「甘さ」は、「映画はあくまでつくりごとの世界」と割り切ればよい。ストーリー展開の現実離れした点をアラ探しするのではなく、「金融腐蝕列島・呪縛」構造の日本をしっかりと見据え、その改革のために何をなすべきかを考える二時間を使つたことに意義を見い出すべきだろう。

一〇年前のバブル絶頂期。日本人は総不動産屋と化し、マネーゲームに踊った。そして銀行・大蔵省はそれを「主導」した。今、日本経済は沈滞し、多くの若者は将来に夢や希望を持てない社会となっている。そして、その根源は、日本の「金融腐蝕」と「呪縛」の構造だった。

しかし金融問題はむずかしい。不良債権という言葉、金融再生という言葉、それ自体なかなか理解できない。だから興味も持てない。特に二〇才、三〇才の若い世代はそうだ。この映画の価値は、何よりもそういう若い人たちに、バブルとは何だったのかを含む日本の金融問題の本質、日本社会の闇の部分の改革の必要性、呪縛を断ち切る勇気の大切さ、等をわかりやすくメッセージした点にある。最近の日本映画では、保険金殺人事件を扱った社会派ドラマである、大竹しのぶ主演の「黒い家」や、司馬遼太郎原作の「梶の城」が面白く、見応えがあった。しかし「金融腐蝕列島・呪縛」は、他の日本映画のどれよりも、若い世代に見て欲しい、そして感想を聞かせてもらいたい作品である。

今回は日本映画をとりあげたが、次回第三弾はまたアメリカの法廷モノをとりあげる予定。乞うご期待。